

鶴見奈央（東京都江東区）

タイトル「初めての国で一番の感動」

私が今までで一番感動したのは、小学校1年生の時だ。私はその時、アメリカに行くことになった。それも観光ではなくて、父親の仕事なので長期間。当時の幼い私にわかったのは、「アメリカ」がとても遠い所らしい、ということだけだった。それでも私は、きっとすぐ日本に帰ってまた友達と遊べるだろうなんて思っていた。しかしそれは「すぐ」ではなく「5年後」だということを、後に親に聞かされたのだった。

結局私は何もできないままアメリカについた。そして、とても怯えた。言葉がまったくわからないのだ。学校には、きっと私と同じ日本人が何人かいる、と親の言葉を信じて来たが、それも思い通りにはいかなかった。私のクラスにいた日本人はたった1人、それも男の子だった。その子は私のために通訳をしてくれた。他のクラスに日本人を探しに行く勇気も行動力もなかったから、彼は私の唯一の助けだった。

しかし、その子だって私に付きっ切りにはなれない。休み時間は他の子、というか男の子と遊ぶからだ。私の最も恐れていた事態だ。私は、なるべく話されずにすむよう心がけた。話すのが嫌なのではなく、話しかけられても答えてあげられないのが嫌だったからだ。そんな私の気持ちとは裏腹に、クラスの友達はとにかく話しかけてくる。今思えば、好奇心旺盛な小学校1年生から逃げるのは不可能だったに決まっている。どうし

たらいいのかわからなくなって、落ち着いてその子達の話聞いた時、私は自分の誤解に気付いた。

「これは花」「これは絵」「これは手」……。彼らは、私から話を聞きたかったのではない。私が英語を知らないから、教えようとしていたのだ。皆一生懸命に、私に言葉を伝えていたのだ。それを知ったとき、私はとても嬉しかった。そして、皆の優しさに、私は初めて「がんばろう」と思えた。

それからは、英語初心者用の特別授業も真剣に受けて、簡単な文なら話せるようになった。そして、小学校1年が終わる時には、話すのはまだまだでも、皆が言っていることは理解できるようになった。今でも私は当時を思い出すと嬉しくなる。たくさんの幼い子供達が、1人の人間に力を与えてくれたことを。